

Radio On The Street
西谷文和

路上のラジオ ファンクラブニュース

2022.5.18 第11号

発行責任者：西谷文和

連絡先：〒564-0041 大阪府吹田市泉町1-22-33

TEL 06-6170-4757

メール otayori@radiostreet.net

このニュースは募金いただいた方、講演会に参加された方に郵送しています。今後も年に4回程度発行します。

ラジオの聞き方

スマホやパソコンで「路上のラジオ」と検索してください。YOU TUBE で聞けます。チャンネル登録していただきますと、毎回お知らせが来るので便利です。

小出先生に聞く その6 ウクライナ戦争と原発

—今回は緊急インタビューです。3月4日、ロシア軍がウクライナ南部のザポリージャ原発を爆撃したというニュースが入ってきました。ここは欧州最大級の原発だそうです。現地では火災が発生し、今は鎮火しているようですが、これ放射能はどくなっていますか？

小出 IAEA（国際原子力機関）の一番新しい報道によると「放射能の放出はない」と。ミサイルが撃ち込まれたようですが、その場所は原子力建屋のエリアではなく訓練施設で、その建物が燃えたように「原子炉そのものに損傷はない」とのことです。

—それを聞いて少しホッとしています。今はロシア軍が支配しているようですが、原発作業員の方々がいますよね。作業員たちが逃げ出したり、殺害されたりすれば誰もコントロールできる人がいなくなるのでは？

現場の作業員でしか制御できない

小出 原発を安全に維持しようとすると、実際にその原発に関わってきた

た作業員以外にはできない、と思います。ウクライナですつとザポリージャ原発を維持してきた労働者たちがそのままそこに留まって作業をしてくれない限りは、原発が危険な方向に行ってしまうと思います。IAEAの報告によれば確かにロシアに占拠はされたけれど、作業員がそのまま運転に当たっていると。

—ロシア軍が「俺たちでやる」というのは無理なんですか？

小出 もともとこの原発はロシアが作った原子炉です。VERというロシアの加圧水型の原子炉でロシアが設計したものですから、基本的なことを知っている科学者がいるとは思いますが、それぞれの発電所の現場には個性があります。きちんと運転に当たっていた人がやらなければ危険な状況になる、ということなんです。

—昔パイロットの方に聞いたのですが、日本はハワイ便に乗っている人は、やはりその便に乗るべきで、日本ヨーロッパ便はちょっとしんどい、と。それぞれの航空機、原発の個性が違うし、運転経験が蓄積されてい

るかないかで大きく違いますよね。小出 はい、私はそう思います。

作業員は疲れ果てていた

—ところが報道によると、作業員たちは疲れてはるんですよ。精神的なストレスもあるでしょうし。

小出 当然です。ただザポリージェ原発で動いているのは4号機だけ。それも60%程度の出力で動かしているとのこと。私としては停止してほしいと思っています。ただウクライナのインフラを支えてきた原発で、電力の20%はザポリージェから簡単に停止してしまうと、今度はウクライナのライフラインが奪われてしまいますので、なんとか安全に動かし続けてほしいと思います。ロシアがこの原発を占拠したということは、ウクライナのライフラインを締め上げるという意味かもしれませぬ。そうなれば早期に停止させられてしまうでしょう。むしろそうしてもらえれば原発の安全という意味ではいいのですが、ウクライナの人々は電力に困るだろうな、と思

ます。

—ロシア軍がチェルノブイリも占拠しました。この目的ですが、やはりライフラインの締め上げ？

**侵略当日に占拠された
チェルノブイリ**

小出 チェルノブイリ原発はロシアがウクライナに攻め込んだ、その日のうちに占拠されました。チェルノブイリには4基の原発があったのですが、2000年には運転停止をしまつていて、価値のない原発。核のゴミだけがあります、そこを占拠することで「ロシアにとつてのメリットはない」と思います。ではなぜ占拠したかといえば、ベラルーシからキエフに侵攻する時の通り道なんです。進軍するにあたってそこを通るしかない、押さえるしかなかった、ということでしょう。

—チェルノブイリは「行き掛けの駄賃」。ザポリージャの場合は、「人々の生活を破壊して降参させてやる」と。

小出 多分そうだと思いますが、どうもザポリージャ原発4号機の運転がまだ続いているようなのです。どういう思惑なのかな、と首をひねっているところですよ。

—イラクでのアメリカの空爆は、まずテレビ局でした。情報を遮断す

る。次に電電公社とか橋や鉄道を破壊して人々を孤立化させる。そのあとに発電所や浄水場。ロシアも同じようにやったとしか思えませんね。

小出 戦争をすれば必ずそういうことをやるんだ、と思います。

—チェルノブイリ事故を経験したウクライナですが、事故にもかかわらず15基も原発を持っています。つまり再稼働させていた。なぜ原発にこだわってしまったのでしょうか？

小出 まだソ連という国があった頃ですが、ウクライナ国内にあったチェルノブイリ原子力発電所が事故を起こしました。大量の被曝をして、汚染地帯が広大な範囲に広がったのですが、それでもウクライナは原発を動かし続けるという選択をしたのです。日本が福島事故を起こしなからなかつ原発を動かし続けている構図とよく似ているな、と思っています。原子力産業、マフィアと呼ばれる人たちが根深く残っているのだと思います。

—ウクライナにも巨大な利権があった？

小出 多分そうだと思います。

ウクライナの研究者たちは今

—3・11から11年です。小出先生たちはあの地震当日、ウクライナから研究者を呼んで学習会、研究会をさ

れようとしてましたね。その研究者さんたちは今、ご無事なんですか？

小出 ウクライナの研究者、あるいはベラルーシの研究者とは同僚の今中哲二（原子力工学者）さんが親密にコンタクトを取ってくださいっていました。今回のロシアによるウクライナ侵攻があつたときに、今中さんがすぐに向こうの2人の、特に親密にしていた研究者に連絡を取つたところ、1人とはすぐに連絡が取れたのです。「キエフにいる。爆発音は聞こえるが無事だ」とのことでした。もう1人はウクライナの役人で、専門家ですが政府に近い人で、この人

とは連絡が取れていない、とのこと。彼はウクライナ人としてロシアに対してかなり厳しい意見を昔から持っていて、「ロシアが攻めてきたらこうするんだ」というようなことを私自身も聞いたことがありますし、ひよつとすると危険な場所にいるのではないかと心配しています。

—政府系の方なら、戦場に向いているかもしれませんが、ロシア軍も狙ってるかもしれませんね。

小出 はい、現在はロシア軍はキエフまで到達していないので、無事にしてほしいと思いますが、危険な立場だと思います。（続く）

馬毛島ルポ 最終回

前号まで

種子島は今や基地賛成派と反対派に2分されてしまった。前号では賛成派の元市長候補を訪ねた。最終回は福島から種子島に移住して、「馬毛島通信社」を立ち上げた猪狩毅士さんの声を紹介する。

—猪狩さんがここに移住してくるまでの経緯を教えてください。

猪狩 2011年3月11日まで、私

たち家族は福島県いわき市に住んでいました。まさか原発が壊れるとは思っていませんでした。

—絶対に壊れません、という安全神話

猪狩 「騙されていました。自宅のすぐ隣が双葉郡で政府は『逃げろ』と言う。しかしいわき市には避難指示は出なかつたんです。道路挟んで向こう側が逃げているのに。

—放射能もウィルスも市町村の境界で止まってくれませんか(笑)

猪狩「原発関係者に友人がいたんです。『ヤバイぞ、逃げた方がいい』と。それで奄美大島に避難しました」

—その後どうしたんですか？

猪狩「いわき市に一時帰郷しました。何しろ着の身着のままでしたから。

あの頃、双葉郡では水道水は飲むな、窓は開けるな、換気扇は回すな。それなのに国は『いわき市は大丈夫です』。家族会議を開いて、結論は移住することに。四国や九州を探し回り、その中で種子島がダントツに良い、と」

—種子島のどこが良かったのですか？

猪狩「手付かずの自然です。人々も優しくかった」

—ここに住んだ頃は馬毛島基地問題を知らなかった？

猪狩「手書きのポスターで『馬毛島へのFCLPは許さない』。へー、基地問題もあるんだ、と」

—その頃は沖縄の辺野古基地が目されていて、馬毛島という名前はメディアにもあまり出てませんでしたね。

猪狩「福島から移住してきたばかりでしょ。東電とのやり取りの中で原発容認派と反対派がいがみ合うような事態になっていた。もう政治問題はコリゴリだった」

—しかし、そことは言ってもらえ

い事態になった。

猪狩「19年1月に政府は馬毛島を160億円で購入。『基地をつくるかも？』が『基地ができてしまうぞ！』に変わった。ここで火がつけました」

—その後、どんなことを？

猪狩「移住者は例外なく反対。そんな時に八板俊輔西之表市長が『失うものの方が大きい。基地はいらない』と。涙が出そうになりましたよ。この市長をなんとしても勝たせるんだ。八板さんをもう一度市長にしよう、と」

—下手したらもう一回移住しないといけない(苦笑)わけですからね。

猪狩「それで『馬毛島通信社』を結成して、ポスター、ビラ、街頭宣伝。ビラは8000世帯分作って全戸配布しました」

—えっ、全世界に？ここは過疎の島。よく配りきれましたね。

猪狩「8枚を3回、それも一軒一軒訪問して、話を聞いてもらいなから」

—人々の反応は？

猪狩「『本当なら、私たちがしないといけないのよ』と。でも『旦那が自衛隊関連で』とか『息子が賛成派の企業に勤めていて』など声を上げられない状態だったんです。『反対してくれてありがとう』という反応

でした」

—その後、街頭宣伝を

猪狩「自分の車にスピーカーつけて、約70カ所で20分ほど。『あきらめないでくれ、迷っていたら、とりあえず八板に入れてくれ』と」

—島の人たちの反応は？

猪狩「泣きながら家から出てくるんですよ、中には号泣している人も。ありがとう、ありがとう、と手を振ってくれて。私たちの気持ちを移住者が代弁してくれた、と」

—猪狩さんたち移住者がいなかったら144票差がひっくり返っていたでしょうね。今後はどうなっていますか？

猪狩「今回の選挙は、『もつと金が欲しい人たち』と『自然を守ろうという人たち』が5分5分だった。今後はアオウミガメやマゲシカなど失いつつある自然を取り戻すことこそがビジネスになるような方策を考えるべきです。そうすれば賛成派も納得するでしょう」

—この10年、猪狩さんのいくところに原発、そして基地。なんでお前ら付いてくるねん(笑)という気持ち

ちは？

猪狩「もちろんあります(笑)。東電も手強かったが、防衛省はもつと。何しろ日米安保が絡んでますからね」

—防衛省の住民説明会には？

猪狩「一発目に質問しましたよ。馬毛島に基地ができた場合とできない場合、どちらが攻撃される確率が高いですか？」

—その答えは？

猪狩「仮定の話には答えられませんが、ちょっと、基地建設は戦争があるかも、という仮定の話でしょ？友人は『今、環境アセスメントをやっているが、どこの業者？誰がジャッジ？』。答えは『防衛省の業者で、防衛省がジャッジ』(苦笑)」

—ドロボーが裁判長になつていい(笑)

猪狩「完全に八百長。基地があれば逆に狙われるんです。もう戦争する時代じゃない。だって核兵器でどちらも滅びてしまうんですよ。ずっとこの島に住んでいられるように、今後も馬毛島通信社の運動を広げたいです」。

この馬毛島取材から、一年以上が経過した。防衛省は無理やり基地建設を強行している。スガから岸田に変わっても住民の声を無視した「アメリカべつたり政治」が続いている。馬毛島問題はほとんどメディアが無視しているので、ご存知ない方も多し。「路上のラジオ」では引き続き、暴拳というべき新基地建設反対運動をレポートしていきたい。(了)

編集長より

「路上のラジオ」は、今年5月で放送開始丸3年を迎えました。これまで続けて来られたのは、ひとりにリスナーの皆様おひとりおひとりのあたたかいご支援のおかげであることに、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

この番組は、打ち切りになったMBS「たね蒔きジャーナル」の精神を受け継いで生まれた「ラジオオ・フォーラム」から、さまざまに変遷を経て現在に至ります。そしてたどり着いたのが、西谷と私の二人だけで番組を作っていく道でした（現在は1名スタジオ収録支援者あり）。意思決定の速さと機動力、意思疎通、そして透明性のある制作体制を担保するためです。正式タイトルを、西谷の名前を冠として「西谷文和路上のラジオ」としたのは、誰でもないひとりのジャーナリスト自身の責任編集を

宣言したかったためです。これだけの情報過多の時代においては、情報を発した者が誰かによって、その情報の信憑性が判断されます。中でも報道を扱う者は、①高い倫理観を持ち合わせているのか？ ②資本をはじめあらゆる権力から無縁であるのか？が問われるのだと思います。その点においては、この番組には自信があります。それはリスナーの皆様ならばご理解いただけていると思います。パーソナリティは西谷ですし、制作費・取材費等はすべて皆様からのご浄財で賄っているのですから！

対して、今の主要マスメディア、特にTVの偏向ぶりはすさまじいものがあります。政権広報のような印象操作が気になる公共放送、民放にあっては資本や番組スポンサーに忖度した報道や番組内容、その頻度においてとうてい政治的

公平とは言い難い出演者の存在、しかしそれらが高視聴率を取っているのですから、一体どうなっているのでしょうか。市民は視野が狭まり、いつしか都合の良い情報だけに操られていないでしょうか。多くの情報にふれることは大切なことですが、それで安心したまま思考停止してはなりません。常に自分事として考えること、そして他人をその大切な自分と重ね合わせる力を持つてば、きつと見えて来るものがあります。「路上のラジオ」が一貫して市民目線にこだわっているのは、そのためです。声なき声を、地べたを這うように集め、増幅する仕事、それが「路上のラジオ」の使命と信じて、これからもより良い番組をお届けしていきたい思います。ひきつづきどうぞご愛聴ください。

(ディレクター・山本素)

2021年収入の部 (単位:円)

前年度からの繰り越し	2,022,375
募金	7,773,365
イベント収入	80,150
合計	9,875,890

2021年支出の部

印刷郵送費	321,506
HP制作・管理	224,400
スタジオ使用料	705,444
番組制作費	6,838,383
合計	8,089,733

来年度へ繰り越し 1,786,157

2021年度も上記の通り、みなさまからの温かいご支援で番組を軌道に乗せていくことができました。昨年度は東京への緊急出張収録も含めて、総選挙前に毎週発信に挑戦することができました。現在も参議院選挙前ということで毎週発信にチャレンジしております。おかげさまで何とかYOUTUBEのチャンネル登録者数も1万9千人を超えて、ミニコミながらも「ハチの一刺し」(BY 榎本三恵子、古いな) くらいの影響力が出てきた

かなー、と考えております。引き続き22年度も充実した番組制作に奮闘する所存です。タブーなし、忖度なしの番組が作れるのも、特定のスポンサーに頼ることなく、市井の方々からのご支援があるからこそだと考えております。引き続きのご支援をよろしく願います。

路上のラジオ事務局
スタッフ一同
西谷文和

編集後記

突貫工事で拙著「聞くだけの総理・言うだけの知事」と「ウクライナとアフガニスタン。戦争の背景に何があるのか」(いずれも日本機関紙出版センター)を書き上げました。5月末出版予定です。こうして本が出せるのもこのラジオのおかげ。毎回、様々なゲストと対談させていただく中で「聞くだけではもったいない。文字にしたい」と感じるからです。今回は佐高信さん、半田滋さん、小出裕章さん、大門実紀史さん、上脇博之さん、矢野宏さんの6名に登場いただいています。参議院選挙前にぜひ読んでほしいなー。そんな願いを込めて書きました。関心が高まって、投票率が上がりますように。